

『論理哲学論考』における意味と意義の区別

大川祐矢*

1. はじめに

フレーゲは論文「意義と意味について (“Über Sinn und Bedeutung”)」などで、言語表現のいわゆる「意味」には意義 (Sinn) と意味 (Bedeutung) の二つの側面があることを主張した。こうした「意味」の二分化は、フレーゲの強い影響の下で執筆されたウィトゲンシュタインの『論理哲学論考』(以下 TLP と略記する) においても継承されており、それらの術語の使い分けには明確な意図を見て取ることが出来る。しかし、そこにおいて成されている意義と意味の区別は、表記こそフレーゲのそれと同様であるが、その内実はかなり異なるものとなっており、単純にフレーゲの区別をそのまま投影するだけでは正確な理解を得ることは難しい。そこで本稿では、TLP における意義と意味の区別にスポットを当て、それをフレーゲの区別と比較することで、ウィトゲンシュタインの区別の仕方の特異点、および何故フレーゲとは区別の仕方が異なるのかについて考察したい。

以上を踏まえて、本稿は次のような構成で議論を進めていく。まず次節では、フレーゲにより措定された意義と意味の区別を概観する。その際、そうした区別をもたらしたアイディアと、その区別を支持していると考えられる観念を、いくつかの項目に分けて素描する。続く第三節で、それらの見解のほとんどに対してウィトゲンシュタインが否定的な態度をとっていたことを示す箇所を提示し、ウィトゲンシュタインがフレーゲとは異なる事由から意義と意味の区別を必要としたということを主張する。それを踏まえ、ウィトゲンシュタインにその区別を要請したものは、「方向」の意味合いを持った意義であると論じる。そして第四節では、意義にそうした解釈を与え得たのは、TLP の言語論が、その中心的なテーゼとして写像理論を採用しているからであることを論じ、それが TLP 独自の意義と意味の区別をもたらしたことを確認する。

2. フレーゲにおける意義と意味の区別

2.1 名における区別

まず始めに、フレーゲによる意義と意味の区別に関する基本的な考え方を、名における区別に焦点を当てることで、大まかに素描してみよう。例えば、「明けの明星は金星である」という命題を考えてみる。直観的にいって、我々はこの命題から何かしらの情報を得ていることは確かである。例えば、明けの明星が金星であることを知ら

ない人は、この命題を聞いて、それまでに持っていなかった新たな知識を得ていると考えられる。しかし、ある言語表現のいわゆる「意味」を、指示対象のみに限定して分析すると、そのことが説明出来なくなってしまう。なぜなら、「明けの明星」も「金星」も、その指示対象は同じ一つの惑星なのだから、その場合、この命題は「金星は金星である」以上の情報を、何も含んでいないことになるからである。

この問題をフレーゲは、言語表現が持ついわゆる「意味」には、二つの側面があると考えたことで解決しようとした。その二つの側面の内、一つは、しばしばそう考えられているように、その表現の指示対象としての意味である。そしてフレーゲが見出した「意味」のもう一つの側面は、その表現の仕方そのものとしての意義である。例えば、「金星」と「明けの明星」の二つの言語表現は、その意味（つまり金星）において共通しているが、その意義においては異なっていることになる。このようにして「意味」を二分化すると、「明けの明星」と「金星」は、その意味においては同一であるがその意義においては異なるため、「明けの明星は金星である」という表現によって、人は「金星は金星である」以上の情報を得ることが出来るのだ、と説明出来る。

以上は名における意味と意義の区別である。次に命題について見てみよう。

2.2 命題における区別

名と同様に、命題においても意味と意義の二つの側面があるとフレーゲは考えた。まずフレーゲは、命題には「思想 (Gedanke)」と呼ばれるものがあることを確認する。思想は、命題が持つ、客観的で多数の人に共有可能なものを指す。そしてこの思想こそが命題の意義であるとフレーゲは考えた。というのも、命題の構成要素となるなんらかの記号を、意味は同一だが意義において異なる記号と取り替えると、命題の思想は変化するからである⁽¹⁾。そもそも命題は複合体であるため、当然その意義や意味もその構成要素の意義や意味の複合体であると考えられた。それ故構成要素の意義の変化に思想が影響を受ける以上、それは命題の意義だと考えられるのである。

では命題の意味とはなにか。フレーゲは、特定の場合を除き、我々は端的に命題を理解する、つまり命題の思想を把握するのみでなく、それが正しいか否かを問題にすることを指摘する⁽²⁾。そして、我々が命題の真偽を把握するために考察の対象とするのは、命題の構成要素の意味であることにフレーゲは注目する。例えば、先の「明けの明星は金星である」であれば、その真偽の判別に用いられるのは、その意味としての金星である。この場合だと、「明けの明星」も「金星」も、その意味において同一であるが故に、この命題は真とされる。意義と同様に命題の意味もまた構成要素の意味から複合的に構成されるならば、構成要素の意味を鑑みた結果導出されるのが真理値

である以上、命題の意味は真理値であると言えるだろう。

このように、フレーゲにとって命題の意義とはその思想であり、その意味とは真理値であった。ここで注意しておかなければならないのは、フレーゲは命題を一つの固有名と考えており、そのためその意味である真理値は何らかの対象でなければならない、という点である。何故なら、名の意味が何らかの対象であるならば、同じ名として解釈された命題の意味もなんらかの対象と考えるのが自然だからである。

2.3 判断について

次にそのようにして区別された意義と意味の関係がどう考えられたかを見よう。フレーゲはこれら二つを認識のプロセスにおいて異なる段階に属すると見なした。これは、意義の把握によって意味が把握される訳ではないということ、命題について言えば、その思想の把握がその真理値の把握と直接的に連関する訳ではないということを示唆する。それ故に、真理値は思想の成分ではあり得ないとフレーゲは主張する。

では、こうした段階間の移行は何によって取り持たれるのか。フレーゲはそれを取り持つ行為を「判断 (Urteil)」と呼ぶ。彼にとって判断とは、単なる思想の把握ではなく、それが真であることの承認である。故に、命題と真理値の関わりを述べるにあたって、判断の要素を不可欠なものであると彼は見なす。そしてある命題が判断済みであること、つまりその真理が承認されていることを示す記号として、判断記号“ $\vdash$ ”が導入された。命題の真理値に関する認識論的な考察に基づくこの記号は、フレーゲの表記法においては論理定項や真理値と同じく原始記号の一つとされる。これは、論理が認識論に基礎づけられるという彼の立場を示唆するものとも言えるだろう。

いずれにせよ、フレーゲにおいて意義と意味の区別は単に「意味」の二つの側面を示したものであるのみでなく、その認識論的な性質の差異を示したものであることは確かであり、TLPにおけるウィトゲンシュタインと比較する上でこの点は重要である。

2.4 まとめ

この節ではフレーゲの意義と意味の区別を、大まかな形ではあるが、素描してきた。その際、そうした区別の背景にあるものとして浮き上がってきたのが、(i) 命題は複合的な固有名である (ii) 命題の意義は思想であり、その意味は真理値であり、真理値は一つの対象である (iii) 意義の段階から意味の段階への移行には判断が必要であり、両者は認識論的に異なる性質を持つため、真理値は思想の成分ではあり得ない、の三点である。おそらく TLP における意義と意味の区別がフレーゲのそれと異なっている要因の一つとして考えられるのは、これらの見解に対してウィトゲンシュタインが全く異なる立場を採っているということである。次節ではその点を具体化しよう。

3. ウィトゲンシュタインにおける意義と意味の区別

ここでは TLP において展開された意義と意味の区別を概観する。その際に、前節で確認した、意義と意味の区別に関わるフレーゲの三つのアイディアに対し、ウィトゲンシュタインがどのような態度をとったのかに焦点を当てる。

3.1 名と命題の区別：(i) について

まず、TLP における意義と意味の区別を一言で表現してみよう。それは、名は意味のみを持ち、命題は意義のみを持つ、というものである。名が意味のみを持ち、意義を持ちえないことについては、例えば 3.143 では、「名のクラスは意義を表現出来ない」と言われ、3.203 では「名は対象を意味する。対象が名の意味である。」という言及がなされている。また命題については 3.221 で、「命題は、ものがいかにあるかを語りうるだけで、ものが何であるかを語りえない。」という言及がなされている。これらはいずれも、意味を名に、意義を命題に限定する立場の表明と解釈出来る。

このように、ウィトゲンシュタインによる意義と意味の区別は、フレーゲのそれと微妙に異なったものとなっている。その要因の一つとして、命題と名に関する両者の見解の相違が挙げられるのではないだろうか。先にも確認したように、フレーゲは命題を複合的な固有名であると考え、実質的にそれらは同じものであると見なしていた。こうした見解に対しウィトゲンシュタインは、命題と名は明確に区別すべきものであると考えたのである。では、ウィトゲンシュタインは命題と名をどのように解釈していたのだろうか。

最初に、命題と名に関する言及がなされている TLP の該当箇所を確認してみよう。3.14 では、「命題記号はその要素である語が、命題において一定の様式で相互に関わり合う、ということに存する」と言われ、さらに 3.2 では、「思想の諸対象に命題記号の諸要素が対応するようにして、思想は命題において表現可能である」と言われている。続く 3.201 および 3.202 では、そうした諸要素が単純記号と呼ばれること、さらに命題において用いられている単純記号が名であることなどが述べられている。

上記の箇所に見出せるのは、名がどこまでも命題の構成要素であり、ましてや命題ではあり得ない、という見解である。名が命題であり得ないのは、まさしくそれが単純記号であるが故である。単純記号とは、「定義によってそれ以上分解出来ない」(3.26) 記号のことであり、つまりは原始記号のことである。それ故、一般に名と見なされながらも、さらに定義出来るような、つまり、記述に置き換えることが出来るような表現は、TLP において名とは見なされないのである。ここには、通常、名と考えられているものが実際は記述の短縮表現であるとするラッセル的な記述説の影響が見られる⁽³⁾。

こうした見解は、命題をむしろ複合的な固有名と見なそうとしたフレーゲのそれとはかなり異質な見解と言えよう。TLPにおいては通常名と呼ばれる記号は名と見なされず、それ以上定義により分解出来ないような、すなわち定義不可能な記号のみが名として残されるのである。だからこそ名と命題は明確に区別されるのである。

ここではフレーゲとウィトゲンシュタインの間に命題と名に対して解釈の相違があったことを確認した。次は、真理値に対するウィトゲンシュタインの見解がフレーゲのそれとかなり異なるものであったことを確認しよう。

3.2 真理値は対象ではない：(ii) について

2.2節で見たように、フレーゲにとり命題の意味とは真理値であった。それ故に、真理値が一つの対象として扱われていたと見なすことが出来る。実際のところウィトゲンシュタインは、このように真理値を一つの対象として見なすことに初期の段階（「論理に関するノート」や「草稿 1914-1916」の執筆時）から反対していた。ここではその点にスポットを当ててみよう。

先にも見たように、TLPにおける意義と意味の区別とは、名には意味のみを認め、命題には意義のみを認める、というものである。しかし、TLP以前の段階では、ウィトゲンシュタインは、命題が意味を持つことを部分的には認めていたのである。例えば「論理に関するノート」の§1や、「草稿 1914-1916」の1914年9月20日の記述にそうした考えが見られる。だが、そうした記述においても、ウィトゲンシュタインは命題の意味として真理値を認めてはいないのである。その時点での彼にとっての命題の意味とは、それが対応するところの事実であった。

では、ウィトゲンシュタインにとっての真理値とはどのようなものだったのだろうか。4.063では次のような言及がなされている。「“p”が真である（あるいは偽である）、と語ることが出来るためには、私はどのような状況の下で“p”を真と呼ぶのかを決めている必要がある。そしてそれによって、私は命題の意義を決定するのである」。「ある命題をどのような状況の下で真と呼ぶか」とは、つまり真理条件のことであると考えられる。そして真理条件を決定することでその意義が定まるということは、真理条件と意義が不可分の関係にある、あるいは、ほぼ同一なものである、という見解の現れであると考えられる。

ここに見られるのは、命題の意義とその真偽を完全に分離したものとして扱わない、という見解である。2.3節で見たように、フレーゲは命題の意義、つまり思想に真理値が含まれることはあり得ないと考えていた。つまり命題の意義とその真偽は認識論的に区別されるべきものであり、それ故完全に分離して扱うべきものとされたのであ

る（そしてその間は判断により取り持たれるとされた）。しかし意義と真理条件とを密接に関係したものとして扱うウィトゲンシュタインの解釈をとるならば、命題の意義とその真理値は、前者が把握されて初めて後者が把握されるという関係にあることになる。真理値が命題における独立変項であると思なすフレーゲの考え方にウィトゲンシュタインが反論するのはそれ故である（4.431）。

このように考えると、彼が真理値をどのように解釈していたかを把握する上で、それを命題の意義との関連において考察する必要が生じてくる。そして、おそらくここで重要となるのは、Kenny (1973)、飯田 (2005) などですでに指摘されている、“Sinn”に含まれた「方向」という意味合いである。フレーゲはこの術語のこうした側面はほとんど気にかけていないが、ウィトゲンシュタインはこの側面をかなり重視している⁽⁴⁾。例えば3.144の比喩、「名は点に、命題は矢に似ている。命題は意義を持つ。」は意義のこうした意味合いを利用した比喩である。では、彼にとって命題が持つ「方向」とはなんなのだろうか。

そのヒントとしては、「論理に関するノート」の次の記述が挙げられよう。すなわち、「命題はいずれも本質的に真・偽である。従って命題は（それが真の場合と偽の場合とに応じて）二つの極を持つ。このことを我々は命題の意義と呼ぶ」（「論理に関するノート」p.94）。さらに、TLPの次の記述も参考になるだろう。すなわち、「命題“p”と命題“¬p”は反対の意義を持つが、それらには同一の現実が対応する。」（4.0621）⁽⁵⁾。これら二つの記述から読み取れるのは、命題は真と偽の場合に応じた二つの極を持っていて、それは当該の命題がそれと対応する事実とどのような関係を持っているかによって決まるということである。逆方向の意義を持つ命題に同一の事実が対応するのは、その事実の成立を描出する命題を否定して導出される命題が、その事実の不成立を描写するからである。このように、対応する事実の成立・不成立のどちらを描出するかこそが命題の方向としての意義なのである。それ故、真と偽、すなわち真理値は、何らかの対象である必要はもはやなくなる。それは当該の命題が持つ方向が、それと対応する事実の成立・不成立のどちらであるかであり、それ故、実際に成立している事実を見てやれば命題の真偽は決定される。こう言ってよければ、真理値は方向としての意義と、実際に成立している事実との関係なのである⁽⁶⁾。

以上、ウィトゲンシュタインにとっての真理値とは、何らかの対象ではなく、命題が持つ方向としての意義が、実際に成り立っている事実との間に持つ関係であることを確認した。このように、真理値が対象として扱われない以上、フレーゲが考えたような、意義の段階と意味の段階を取り持つ「判断」の扱いも当然変わってくる。次節でそれを確認する。

3.3 「判断」は不要：(iii) について

2.3 節で確認したように、フレーゲにおける判断とは、意義の段階から意味の段階への移行を取り持つ役割を担っていた。逆に言えば、判断なくしては、命題の意義から意味を把握すること、すなわちその思想を理解し、さらにその命題の真偽を判別することは出来ないことになる。そしてそれは、まさしく論理に属する要素（つまり真理値）が、認識論的な行為によって基礎づけられていることを示している。

しかしウィトゲンシュタインは、「フレーゲの「判断記号“ $\vdash$ 」は論理的には全く無意味である」（4.442）と断ずる。その記号はその命題が真であることを表明する役割は担っても、その命題の論理にまで関わってはこない。これは、4.1121 で表明された、論理が認識論に基礎づけられないことに関する、具体的な事案についての主張であると考えられる。

ウィトゲンシュタインは、意味や意義といった論理的な概念が、認識論によって規定されることを強く拒絶する。それは、論理とはア・プリオリなものであり、それ故、経験的で偶然的なものによって規定されるはずが無いと考えたからだ（5.4731、5.634）。そのため、フレーゲが認識論的性質をもとに区別した意義の段階と意味の段階という枠組みを、ウィトゲンシュタインは完全に放棄する。意義と意味の区別そのものは維持しながらも、彼はそれらの関係性についてはフレーゲと全く異なる立場を採ったのである。結果、TLPにおいて「判断」という要素は、フレーゲの議論のように、なんらかの基礎的な所作であるとは全く考えられなくなったのである。

3.4 まとめ

これまでに命題と名、真理値、そして判断に関するウィトゲンシュタインの見解を確認してきた。それらはいずれもフレーゲのそれぞれの見解をことごとく批判しており、かなりの点で両者の議論が異なっていたことが分かる。それを踏まえた上で、もう一度意義と意味に関する両者の区別の相違を見てみよう。

フレーゲは命題と名が意義と意味の両方を持つとし、一方ウィトゲンシュタインは命題は意義のみを、名は意味のみを持つとした。命題が意味を持たないのは、フレーゲにおいてその意味とされた真理値は、ウィトゲンシュタインにとり対象でもなんでもないからである。また、名が意義を持たないのは、それが命題と完全に区別されるべき単純記号であるからであり、それにはいかなる事実も対応しないからだ。

フレーゲにとり、命題と名の両方が、意義と意味の両方を持つという考えは、その見解からしてむしろ必然的なものであったと言える。というのも、彼にとって命題と名は区別されるべきものではなかったし、真理値は対象として存在することが出来た

からだ。それに何よりも、意義の段階と意味の段階は、明確に区分された独立のプロセスであり、ただ判断によってのみその間には取り持たれるものであったからだ。つまり、意味と意義は言語表現が持つ二種類の客観性であり、意味にたどり着くためには、意義を把握する必要があったのである。故に、フレーゲの言語観において、命題であれ名であれ、なんらかの言語表現に意味と意義が備わっていることは、必然的な事柄だったのである。

しかし、ウィトゲンシュタインにとって、命題と名の両方が意義と意味を持つことは、なんら必然的なことではなかった。何故なら、彼にとって命題と名は明確に区別されるべきものであったし、真理値が何かの対象として存在することは許されなかったからだ。それに加えて、認識論を考慮しない彼の言語観は、意義と意味が、その把握において別の段階にあるなどという想定をなんら必要としなかった。それらの間に段階の区別等は存在せず、それらには名が持つか、命題が持つかという差異しかないとされたのである。それ故に彼は、名が意味のみを持ち、命題が意義のみを持つと主張することが出来たのである。

このように考えると、むしろ何故ウィトゲンシュタインが意義と意味という言葉を使い分けたのかが不思議に思えてくる。フレーゲのような認識論的な基礎付けがないのであれば、どちらか一方のみで十分だったのではないだろうか。ウィトゲンシュタインには意義と意味を区別する必然的な要請などなかったのではないだろうか。こうした疑問が生じるのは至極真つ当であると思われる。だが、彼の意義と意味という言葉の使い分けには、確固とした理由が存在していると私は考えている。それを紐解くためには、彼の言語観の根本的なテーゼである、写像理論に触れる必要があるだろう。

4. 区別の要因：写像理論を通して

4.1 「命題は現実の像である」というテーゼ

TLPにおいてウィトゲンシュタインが意味と意義を区別した正確な理由を把握するための準備段階として、ここでは彼の言語観の中核をなすテーゼである写像理論をごく簡単にであるが見ておこう。写像理論とは、その名の通り、「命題を現実の像である」(4.021)と見なすテーゼのことである。ここでいう「像」に対してウィトゲンシュタインは少し変わった特徴付けをしており、それは写像形式、すなわち、その構造の可能性を事実と共有するものであるとされる(2.15、2.151)。構造の可能性を共有する像は、それ故に、その構成要素においても対応しているとされる(2.13、2.131)。例えば命題の構成要素は単純記号、すなわち名であり、それは命題が対応する事実を構成する対象と対応するとされる(3.203、3.22)。また、そうした写像形式は様々であ

るが、最低限像と事実が共有していなければならない形式が論理形式、すなわち現実の形式である (2.18)。論理形式を事実と共有する像は論理像と呼ばれ、それ故命題を含む全ての像は論理像であるともされる (2.181、2.182)。そして、事実の論理像が、TLPにおいて思想と呼ばれるものである (3)。

写像理論の大枠は以上である。必要な問いは、こうした枠組みが、TLPにおける意義と意味の区別に対し、どのような役割を果たしているかである。これまでも述べたように、TLPでは命題には意義のみを、名には意味のみを認める立場を採っている。名の意味とは、それを含む命題が対応するところの事実を構成する対象を指す。おそらくこの点についてはウィトゲンシュタインとフレーゲは一致していると言える⁽⁷⁾。だが、意義に関しては、彼らはかなり異なる立場を採っていると考えられる。2節で確認したように、フレーゲにとっての意義とは、ある言語表現の、表現の仕方のことであった。それ故意味において同一である表現も、意義による差別化を図ることが出来た。しかし、ウィトゲンシュタインにとって意義とは、単なる表現の仕方に留まらないものである。以降で、写像理論という枠組みにおいて意義という術語をいま一度俯瞰してみよう。

4.2 方向としての意義

意義については、3.2節で引用した「命題“p”と命題“¬p”は反対の意義を持つが、それらには同一の現実が対応する。」(4.0621)に加え、例えば次のような言及がなされている。「命題はいずれもすでに意義を持っていないなければならない」(4.064)、「命題の意義とは、命題の、諸事態の成立・不成立の諸可能性との一致・不一致である」(4.2)、「否定は命題の意義を逆にする」(5.2341)等々。

これらの記述に見られるのは、名と意味と対象の関係と、命題と意義と事実の関係はかなり異なるものである、ということである。それは、同じく3.2節で引用した比喩、「名は点に、命題は矢に似ている。」(3.144)においても端的に示されている。ここでも重要なのは、“Sinn”が「方向」の意味合いを持っていることである。名と対象の間にあるのは、端的に対応しているか否かのみである。対応しているのであればその対象がその名の意味であるし、対応していないのであればその対象は別の名の意味である、ただそれだけの関係である。しかし、命題と事実の間には、単なる対応関係に加えて、命題が持つ方向としての意義の要素が関わってくる。この点は、上記の4.0621と5.2341からも読み取ることが出来る。4.2で言われていることもほぼ同様のことであり、対応する事実との成立・不成立の二つの方向としての意義を命題は持っているのだと言えよう。前節でも確認したように、そうした方向としての意義と実際に成立

している事実との関係こそが、命題の真理値の正体なのである。

このような形で意義を解釈するには、実際のところ写像理論の枠組みが不可欠である。というのも、ここでは命題の方向としての意義は、命題が事実と写像形式を共有しているが故に成り立つものであるからだ。命題が何らかの方向としての意義を持つためには、まずはそれが何らかの事実と対応している必要がある。何らの事実とも対応していない命題は、例えばトートロジーや矛盾のように意義を欠いていたり（4.461）、あるいは語りえぬものについて語ってるとして、端的に無意義とされる（4.003 など）⁽⁸⁾。写像理論の最大の特徴は、命題を像と考えることで、それを常に何らかの事実と対応するものに厳しく制限しているところにある。それ故に命題は本質的に真であるか偽であるかのどちらかでなければならず、その方向としての意義の側面が強調されるのである。仮に写像理論の枠組みを採用していなければ、おそらく TLP で意義を欠いているとか、無意義であるとみなされるもののほとんどを、真正の命題と認めざるを得なくなるだろう。なぜならば、それらを真正な命題のカテゴリーから排除する基準として、事実との対応関係を持ち出すことが出来ないからだ。

先にも述べたように、こうした方向という側面を意義が持っていたことは、既に何人かの論者により指摘されていることである。しかし、意味と意義の区別の要因としてそれを指摘した論者は私の知るところではない。先にも指摘した Kenny (1973) は、命題と名を差別化する一つの要因として方向としての意義は挙げているものの、それが意義と意味の区別においても重要な役割を果たしていることは論じていない。また 飯田 (2005) においても意義と意味の区別におけるその働きは指摘されていない。こうした見解に対し、命題と名の区別の主要因は方向としての意義という側面のみにあるのではなく、3.1 節でも述べたように、むしろそれはラッセル的な記述説をウィトゲンシュタインが採用していたことにあると私は考えている。そして方向としての意義という側面が関わってくるのは、むしろ命題と名がそのようにして分析され区別された後の、両者の意味論的な側面についてであると私は考える。故に、方向としての意義の内実については従来の見解を踏襲しつつも、それが命題と名の区別ではなく、むしろそれらの意味論的な側面、すなわち意義と意味の区別を要請したの点で私の見解は従来の見解と異なっていると言えよう。

ともあれ、以上の考察から次のように結論することが出来る。写像理論の枠組みは、真正な命題を事実と対応するものに限定する役割を果たした。その結果、命題は本質的に真か偽であるものとされ、そうでないものは真正な命題ではないとされた。そして、命題の「真である」や「偽である」という特徴は、その命題が持つ方向としての意義が実際に成り立っている事実との間に取り持つ関係であると考えられ、そうした

方向を持たない名の意味との差別化を図るために、TLPにおける意義と意味という術語の使い分けが生じたのである。

5. おわりに

本稿ではTLPにおける意義と意味の区別について、フレーゲが与えた区別と比較する形で論じてきた。単純に、TLPがフレーゲの強い影響の下で書かれたという事実のみに着目する限りでは、両者の相違は命題と名の両方に意味と意義を認めるか否かという違いに終始してしまうだろう。もちろんウィトゲンシュタインが、意味と意義を区別するというアイデア自体をフレーゲから受容していることは明らかではある。しかし、本稿でこれまで見てきたように、フレーゲに意味と意義の区別をもたらした要因と、ウィトゲンシュタインにそれをもたらした要因は、全く異なるものであった。事実、フレーゲにおいてその区別を支持したと考えられる諸見解をウィトゲンシュタインはことごとく批判しているのであった。また、両者の間では、そもそも意義に対する見解にもかなりの隔絶があった。すなわち、フレーゲが意義を表現の仕方と考えていたのに対し、ウィトゲンシュタインはそこに方向の意味合いを込めていたのである。そして、前節で見たように、そうした方向としての意義こそが、ウィトゲンシュタインに意味と意義の区別を要請したものであり、その背景には彼独自の言語観である写像理論があったのである。

以上から、次のように結論することが出来よう。すなわち、フレーゲとウィトゲンシュタインにおける、命題と名の両方に意味と意義を認めるか否かという違いは、その裏に隠された、両者の言語観における様々な相違の一つの現れに過ぎない。その背景にはウィトゲンシュタイン独自の言語観である写像理論があり、またそこから派生した論理的对象の拒絶、さらには記述説をベースとした命題と名の区別、そして認識論により論理を基礎付けすることへの疑いがあったのである。

註

* g630247@gmail.com

(1) 先の「明けの明星は金星である」という命題を例にとる。例えば、その構成要素である記号「明けの明星」を、意味は同一だが意義において異なる「金星」と取り替えてみよう。そうすると「金星は金星である」という命題が出来上がるが、その際、命題が持つ情報、すなわち思想が変化していることは、先に確認した通りである。

(2) 命題の真偽が問題とならない例としてフレーゲが挙げているのは、例えば役者の台詞や、詩歌の一文などである。逆に命題の真偽がとりわけ問題となるのは学問における命題とされる。

(3) Cf. Russell (1905)

(4) “Sinn”のこうした側面は「論理に関するノート」や「草稿 1914-1916」においても強調されており、ウィトゲンシュタインがそれを重視した上でこの術語を用いていたことが推測さ

れる。

(5) 「論理に関するノート」の引用箇所直後にもこれと類する記述がある。

(6) ある命題が真であるか偽であるかは、意義を把握するのみで判別出来るというわけではなく、そのためには、命題と事実とを比較する必要がある (2.223)。しかしこれは、フレーゲのように判断によって命題の意義と真理値の間が取り持たれるということを言っているのではない。ここで言われているのは、事実と命題の比較によって対象としての真理値が導出されるのではなく、方向としての意義と実際に成立している事実との関係としての真理値が把握されるということである。

(7) もちろん、名として何を認めるかについては両者の間に齟齬があることはすでに確認した通りである。また、対象としてどこまでを認めるかについても両者の見解には齟齬がある。例えば、先にも見たように、真理値などの論理的对象をウィトゲンシュタインは認めない。とはいえ、「意味は対象である」という大枠においては、両者の見解は一致していると言えよう。

(8) 「意義を欠く (sinnlos)」と「無意義 (Unsinn)」は TLP では峻別して用いられていることに注意されたい。前者は、必ず真か偽のいずれかでしかないが故に、本来命題が持つべき意義が欠如しているものに用いられ、後者は、そもそも真でも偽でもないようなものに用いられている。この区別は重要であるが、本稿では意義に方向の意味合いがあることを強調することに重きを置いているので、このように並列して用いた。

文献

Anscombe, G. (1959). *An Introduction to Wittgenstein's Tractatus: Themes in the Philosophy of Wittgenstein*: St. Augustine's Press.

Frege, G. (1892). 'Über Sinn und Bedeutung,' in *Funktion, Begriff, Bedeutung*: Vandenhoeck und Ruprecht, 1980, 40–65, (土屋俊訳, 「意義と意味について」, 『フレーゲ著作集 4』所収, 勁草書房, 1999 年, 71–102 頁) .

飯田隆 (1987). 『言語哲学大全 I 論理と言語』, 勁草書房, 1987 年.

—— (1989). 『言語哲学大全 II 意味と様相 (上)』, 勁草書房, 1987 年.

—— (2005). 『ウィトゲンシュタイン 言語の限界』, 講談社, 2005 年.

Kenny, A. (1973). *Wittgenstein*: Penguin Books, (野本和幸訳, 『ウィトゲンシュタイン』, りぶらりあ選書/法政大学出版局, 1982 年) .

野矢茂樹 (2002). 『『論理哲学論考』を読む』, 哲学書房, 2002 年.

Russell, B. (1905). 'On Denoting,' *Mind*, 14, 56, 479–493.

Wittgenstein, L. (1922). *Tractatus Logico-Philosophicus*: Routledge & Kegan Paul, 1922, (野矢茂樹訳, 『論理哲学論考』, 岩波文庫, 2003 年) .

—— (1961a). 'Notebooks 1914–1916,' in von Wright, G. & Anscombe, G. eds. *Notebooks 1914–1916*: Blackwell, 2–91, (奥雅博訳, 「草稿 1914–1916」, 『ウィトゲンシュタイン全集 1』所収, 大修館書店, 1975 年, 121–290 頁) .

—— (1961b). 'Notes on Logic,' in von Wright, G. & Anscombe, G. eds. *Notebooks 1914–1916*: Blackwell, 93–106, (奥雅博訳, 「論理に関するノート」, 『ウィトゲンシュタイン全集 1』所収, 大修館書店, 1975 年, 291–317 頁) .

〔京都大学大学院修士課程・哲学〕